

# 詩の街

ひゅう

## 詩の街

ジルは夕食にありつくために、食堂の角の席に座ったところだった。ちんまりとした歴史を感じる町並みと中央に流れるちいさな川が美しい、大陸の南部の街である。ホテルに荷物を置いた後、すっかり夜になった街をぶらつき、白い塗り壁のまるい窓がいたドアに惹かれて食堂に入ったのだった。

メニューは共通語でも書かれていたが、とても難解で、どういった料理がだされるのかよくわからなかった。

背に腹は代えられないわけで、とりあえず「海の雫」という飲み物と「精霊が潜む森」というサラダと「いつかたどりつく道」というメインディッシュを選んだ。なんだかどれも歌のタイトルのように、いったいどんなものが出されるのか、ジルは不安でいっぱいになった。説明文もついているが、とても抽象的になっており、なんのことだかわからない。

しばらく待つと「海の雫」がやってきた。どうやら海水を使用した特殊な果実酒のようで、南国のフルーツと、ほんの少しだけ塩の香りが漂う、不思議な味わいの酒であった。

「精霊が潜む森」というのは、ロックラック山という大陸の中央にある山の森で採れた黒い野菜のサラダである。なぜ黒くなるのかはいまだに不明であるが、古代には「魔の森」と呼ばれ恐れられていたが、科学の力で「魔」は存在しないことが証明されると、今度は「精霊」が住むと噂され始め、どうやらそれが本当らしいことをあばくいくつかの書籍がセラ国内でベストセラーになった。もちろんジルは知る由もないが。

「いつかたどりつく道」というのは、鹿のような動物のもも肉を焼いたもの。鉄板の上でじゅうじゅう音を立てているものがそのままてくる。

すべてを平らげるとホテルにもどり、明日の準備をして眠ることにした。眠りをさまたげられることが多く、街から街へ移動する際はいつも緊張しているジルであったが、今回は何事もなく自由に眠れるようだった。

翌朝、ロビーで朝刊でも読もうと階段を降りたジルは、朝刊を目にして違和感を感じた。

すべて詩でできている。新聞がすべて詩でできているのだ。事件や経済のニュースなどはいっさい掲載されておらず、すべて詩なのである。

「旅人かね？」

突然、横でコーヒーを飲んでいた老人がジルに訪ねた。しわがれた声と同様にいくつものシミと皺とを持ち合わせており、髪の毛は一本も残っていない老人男性である。

「ええ、そうです」

ジルは短く会釈すると、新聞に目を戻した。

「この街ではなあ」老人は視線をそらしたジルに向けてなお語り続けた。

「すべての出来事が詩で表現されるのだ。この新聞だってそうであろう。新聞という名の詩なのだ。新聞詩と呼ばれておる」

”新聞詩”とは、また何か古風でくだらない冗談のような言葉だ。

老人は続けた。

「いま少し、くだらないと思っただろう？」

ジルの心は見透かされているようだ。ジルは鼻で笑ってからこくりと頷いた。

「そういう、古風なジョークのことを我々は『ほころび』と呼んでおる。この『ほころび』は時代とともに変化していき、やがてほつれ、言葉としての役目を終えていくのだ」

老人は遠く、言葉の墓場を連想でもしたのか、ロビーから見える庭のそのまた向こうの空に視線を移動させて、途方もない言葉の魂のつらなりを思った。

「あなたは？」

ジルはいつも、他人に干渉をしないつもりで、街から街へわたってきた。こんな質問をしたのは初めてである。

「私か、私は詩人である。この街の人はすべて詩人なのだ。ひとりのこらず。見たところ、そなたも詩を吟じるように見えるが、どうかね」

「ええ、少しならば」

「そうか。では、新聞にひとつ、詩を載せてみないかね」

老人は空の向こうから視線をジルへと戻し、視力の衰えていないその目で旅人を捉えた。

「ビジネスは嫌いです」

ジルが断ると、老人は大きな声で笑った。ロビーに響いて、フロントのホテルマンの数名が何事かとこちらに注目したようだったが、老人はかまわず大きく笑った。

「君は、スピリータをもっておる」

「スピリータ？」

「魂のことだよ。この街では、詩心を持っておる者をスピリータと呼ぶ。近頃は教育制度の変化で若年層にスピリータを持ち合わせている者が減った。おお、嘆かわしいことよ！」

どこか芝居じみた老人の大きな声に圧倒され、ジルは会話のイニシアティブを完全に持っていた。

「あなたは……」ジルは少し考えてから続けた。「あなたは、誰ですか？」

老人は、いま答えたであろう、と笑った。

「いいえ、ただの詩人ではないはずです」

「どうしてわかる？」

「スピリータを持っていない若者はどうなるんですか？」

「よい質問だが、詩的な質問ではないな」

ジルは、そこまでのやりとりで、すこしだけわき起こり始めていた疑惑と他人への干渉をやめることにした。新聞にまた目をやる。

朝日はもう、昇りきって、あとはオレンジ色になるのを我慢するだけ。

旅の支度を済ませたら、遠くまで行こう。

雨があがれば扉も開く。世界がまわれればそとに放りだされるさ。

クレヨンとタクシーと、傘とワイン。

雲は今日も詩人のように考えごと。

猫は自転車に乗れない。

四角形の夢はまるでおもちゃ。

明日にたどりつくのはいつだろう。